

「平和」を支える真の国際理解

広島大学附属三原中学校 安井盛一
米子市立尚徳中学校 高石博史
米子市立後藤ヶ丘中学校 宇城 明

1. 研究の目的

本年は第二次世界大戦後50年目の年にあたる。この50年間、幸いに日本は直接戦争に参加することはなかったため、第二次大戦の体験者の数はどんどん減少してきている。そして、今では「平和ボケ」などという厳しい表現で日本人の実態を批判されている。つまり多くの日本人が「平和は大切である」ということは言えるが、「平和って何?」とか「平和な世界を築くために何をすべきか?」などと問われると、言葉に窮する。したがって、「国際化」が声高に叫ばれながら、どのような国際社会を理想とするのかさえイメージできにくい実態になっているのである。

このような日本とさまざまな国際紛争解決のリーダーシップをとってきているアメリカとでは、人々の平和に関する意識はかなり異なっているのではないかと考えた。そこで、アメリカの人々の平和に関する生の声を集め、それを日本人のものと比較しながら、(つまり、「平和」を自分とは異なる立場から見つめることを通して)「国際協調とは何か」「そのために何をすべきか」を考えさせられるような教材開発を進めることを我々のチームの研究方向として決定した。

したがって、この教材開発の目的は次のようになる。すなわち、『偏見から生まれる諸問題を解決するために、相互の歴史観の相違を知り、共通の目的をもって国際強調を進めていこうとする心を日米両国民の中に育てる。』

2. 研究の方法

- (1) 日米の中・高生の平和に関する意見文を集め、それぞれが平和に関してどのような考えや願いを持っているのかを知る。

(意見文を読んで不明なところは、日米の代表者を通して質問しあい、互いの意図するところを理解する。)

- (2) 意見文の内容を分類する。

- (3) 平和を国際協調という側面にとらえるとき、それを育むために必要なことは何かを考える。

(特にアメリカでは、多民族社会の中でみんなが上手く生きていくために現

実に努力していることが多くあると考えられるので、日本側はそこから学ぶことができる。)

- (4) 教材は中学生を対象に考え、集めた資料を中学生が理解しやすいように加工する。また、アメリカでしか入手できない有効な資料を集める。

3. 調査内容・結果

(1) 日米の中・高生の意見文の収集（6月～7月）

○アンケート項目の検討

ジョン・レノンの「イマジン」を聞き、歌詞に込められた平和に関する彼の意見を知る。それをもとに、自分の意見を文章で表す。

○日本の中学生の意見文

広島大学附属三原中学校3年生・・・83名（日本語）

米子市立尚徳中学校3年生・・・20名（英語）

米子市立後藤ヶ丘中学校3年生・・・20名（英語）

○アメリカの中・高生の意見文

「サトリ」スクール・・・20名（英語）

(ノースカロライナ州グリーンビル) 15名（日本語）

(2) 意見文の分類（8月）

日本側・・・安井盛一，高石博史，宇城明

アメリカ側・・・エドウィン・ベル氏（E.C.U.教授）

ジェイ・ジェスター氏（ローズハイスクール教師）

ヴィッキー・アンダーソン氏（ローズハイスクール教師）

フィリス・ウートン氏（ローズハイスクール教師）

- ① 日米の中・高生の意見文は、かなり共通点が多く、国ごとに分類できる特徴は発見しにくかった。
- ② 日米ともに、大きく2つのグループに分類できそうである。
 - ア. 平和を戦争とのかかわりでとらえ、戦争のない社会をめざすべきだと主張するタイプ。
 - イ. 平和を日常生活とのかかわりでとらえ、差別や偏見のない社会をめざすべきだと主張するタイプ。
- ③ 全体の資料数、資料の男女バランス（全体的に女子の意見文が多かった）などの点から、男女による意見内容の分析をおこなう条件は不十分であると判断した。

(3) 国際協調を育むために必要なこと (8月)

① 紛争・戦争の背景には、当時国(者)の立場や事情があるので、自分の主張ばかりを通していたら、解決の糸口は見えない。

ア. ミネアポリスでの「原爆に関する意見文」・・・6名

(13歳から78歳)

・・・(原爆投下について)我々がどう感じたか?
『ほっとした』—なぜならそれは、日米双方にとって流血の終わりを意味したからである。軍隊と戦場を経験してきた私がいえることは、『戦争』という時代においては、自分たちの命が、相手のそれよりも優先されるのは当然だ—ということである。

ロバート・ワグナー氏(71歳 男)

戦争はしだいに激しさを増し、追いつめられた日本軍は最後まで抵抗した。そのためアメリカ軍は硫黄島の戦いで3万人を失い、日本本土への上陸では、さらに30万人もの若者が命を落とすと予想された。それを防ぎ、彼らを家族や恋人のもとへ無事に返すためにも、原爆を使用するしかなかったと今でも私は思っている。

レオ・シマ-氏(78歳 男)

イ. ワシントンD.C.での「エノラ・ゲイ展」・・・見学



(エノラ・ゲイ)

This display commemorates the end of World War II and the role of the B-29 Enola Gay in the atomic mission that destroyed Hiroshima and, along with the atomic bombing of Nagasaki, led to the surrender of Japan on August 14, 1945.

The National Air and Space Museum originally planned a much larger exhibition, which concentrated attention on the devastation caused by the atomic bombs and on differing interpretations of the history surrounding President Truman's decision to drop them. That planned exhibition provoked intense criticism from World War II veterans and others, who stated that it portrayed the United States as the aggressor and the Japanese as victims and reflected unfavorably on the valor and courage of American veterans. The Museum changed its plan substantially, but the criticism persisted and led to my decision to replace that exhibition with a simpler one. In a statement I issued at that time I said the following:

I have concluded that to make a break after attempting to couple an historical treatment of the use of the atomic weapons with the 50th anniversary commemoration of the end of the war. Exhibitions have many purposes, equally worthwhile, but we need to know who's going to passers and not to confuse them.

The new exhibition should be a much simpler one, essentially a display, presenting the Enola Gay and its crew to speak for themselves. The focal point of the display would be the Enola Gay, along with the plane would be a video about its crew. It is particularly important to this commemorative period that veterans and other Americans have the opportunity to see the restored portion of the fuselage of the Enola Gay.

The exhibition you are entering does what I intended, with a few changes. We have added material on the Smithsonian's restoration of the Enola Gay and some explanatory material on the B-29 aircraft and the 50th Composite Group, which was led by then Col. Paul Tibbets, who piloted the Enola Gay on the Hiroshima mission. We also have a section at the end where we ask for your reactions to the exhibition. We welcome your comments.

L. Michael Heslov

(スミソニアン博物館の館長の言葉)

ウ. テレビ番組「WHY THE BOMB WAS DROPPED」・・・トウイン・ベル氏

(PETER JENNINGS SPECIAL 1995・7・27放送) より提供される

アメリカでは、広島・長崎への原爆投下についての情報は、日常的にはほとんどない、という実態であるらしい。なぜなら、このVTRに収録されているテレビ番組が、原爆投下をアツかった番組としては、はじめてのものであるらしいからである。したがって「アメリカの子どもたちは、日本の被爆についてほとんど知らない」ということを前提にして、教材づくりを進める必要がある。

エ. ワシントンD.C.での「ホロコースト博物館」・・・見学

②相互理解を可能にするためには次のようなことが必要である。

ア. 自分とは異なる民族・文化をもつ相手を寛容する心

イ. 自分とは異なる民族・文化をもつ相手を尊敬する心

ウ. 自分とは異なる民族・文化をもつ相手に関する知識

(宗教・文化・歴史)

父(ハート・ワグナー氏)が原爆投下に対してもつ考えは、彼の体験からやむをえないと思う。私は日本に留学したことがあるが、その時、父は「なぜ日本なんかに行くんだ?」といった。しかし、友だちから日本のことを聞いて、日本がどのようなところか、日本人がどのような人間なのかを知っていくうちに、しだいに変わっていったようである。

オープンマインドな人やある程度の教育(大学教育)を受けた人ならば、自ら進んで自分の意識変革をおこなう場合もあるだろうが父のような例は実際には多くはないと思う。

(エリザベス・シマー氏)

エ. ア～ウを行う前提として、まず自分に関する知識をもち、それを敬意をもって見ることができるようになること

(4) 教材づくりのために必要な資料の加工・収集(8月)

① 教材づくりの方向性を具体的にする。

1. 「イマジン」を聴き、平和についての自分の意見文を書く。

2. 第2次世界大戦当時の互いの国の立場や状況を知る。

(日本) 米国はどのようにして原爆を投下したのか?

・体験談(ハート・ワグナー氏, レオ・シマー氏)

・対日感情(ワシントンポストのイラスト)

(アメリカ) 日本人はどのようにして原爆投下について、特別なこだわりをもっているのか?

・体験談(被爆体験)

・対米感情(検討中)

3. 日米の中・高生の平和に関する代表的な意見文を読み、双方に「国際協調をしていく必要がある」という共通した願いがあることに気づく。

4. 国際協調をしていくために、今後どのような行動をすべきかを話し合う。

5. 平和についての、自分の意見文を書く。

6. 日米の学校で同時に学習を進めることができれば、5で書かれた意見文を日米で交換し、意見交流を図る。

② 日米の代表的な意見文を選定する。

日本・・・亀山真美（14歳 女）

アメリカ・・・ラシュミ・ビセン（14歳 女）

③ 代表的な意見文を日本語・英語に翻訳し、中学生に理解できる内容の文章に意識する。

・・・お互いの文化を理解し、そこから何かを学ぼうとする姿勢が必要です。自分とは異なる文化を理解することは、自分の視点ではなく、相手の視点で物事を見ることができるようになってはじめて可能になるのではないのでしょうか。・・・（相手の）文化が持っている良さを認めようとしなければなりません。何もかもが同じでなければならぬということはないでしょう。・・・

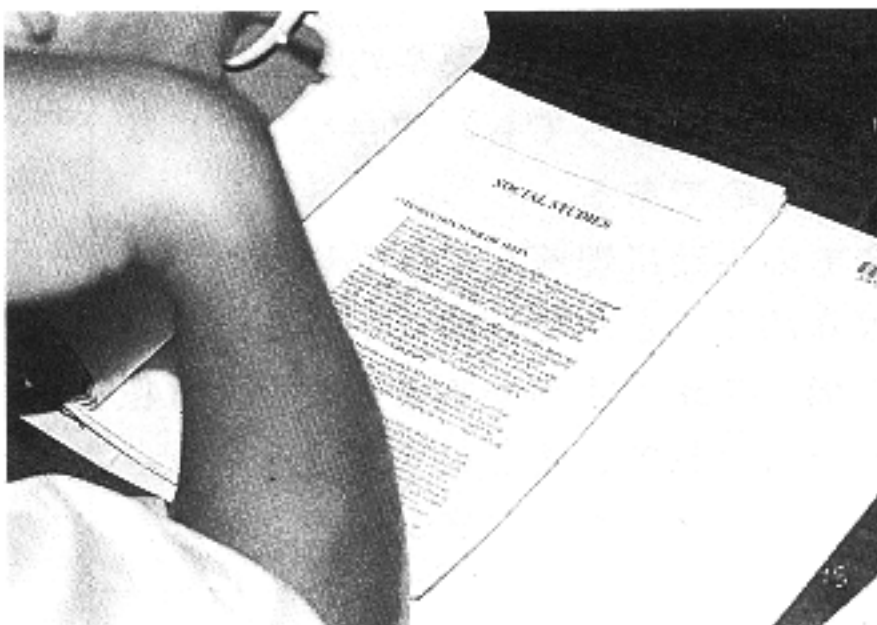
ラシュミ・ビセン（14歳 女）

・・・私たちは同じ星の上に住んでいるのだから、互いに助け合うのが当然だと思います。・・・こういったことの実現を目指すのは、子どもである私たちには大変荷が重いことのように思えますが、まず自分たちが今いる教室や地域で、互いに助け合ったり友達の幸せについて考えていくことから始めるのがいいと思います。

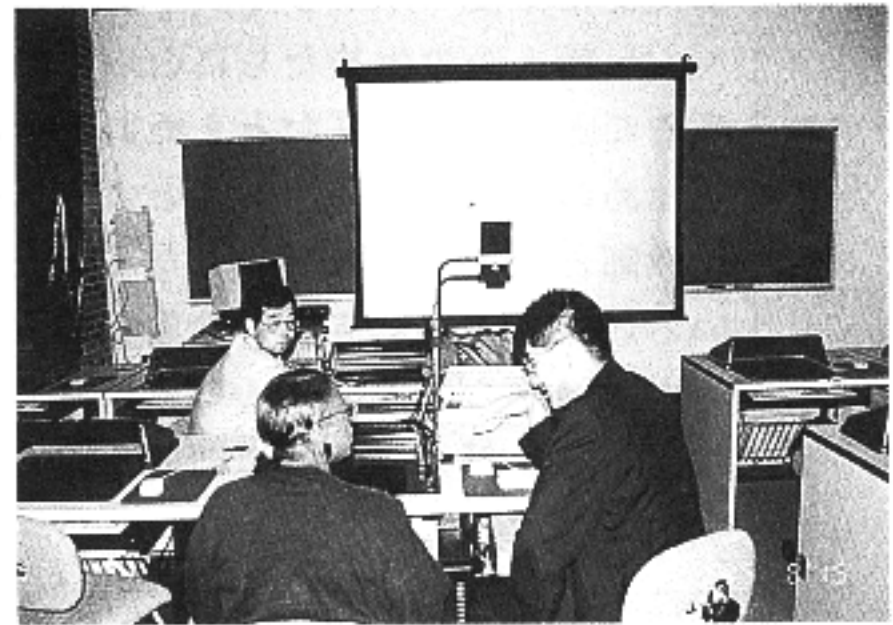
亀山真美（14歳 女）

④ 国際協調について考えるために、有効な資料をさらに収集する。

ア. アメリカのコース・オブ・スタディ（E.C.U.図書館）

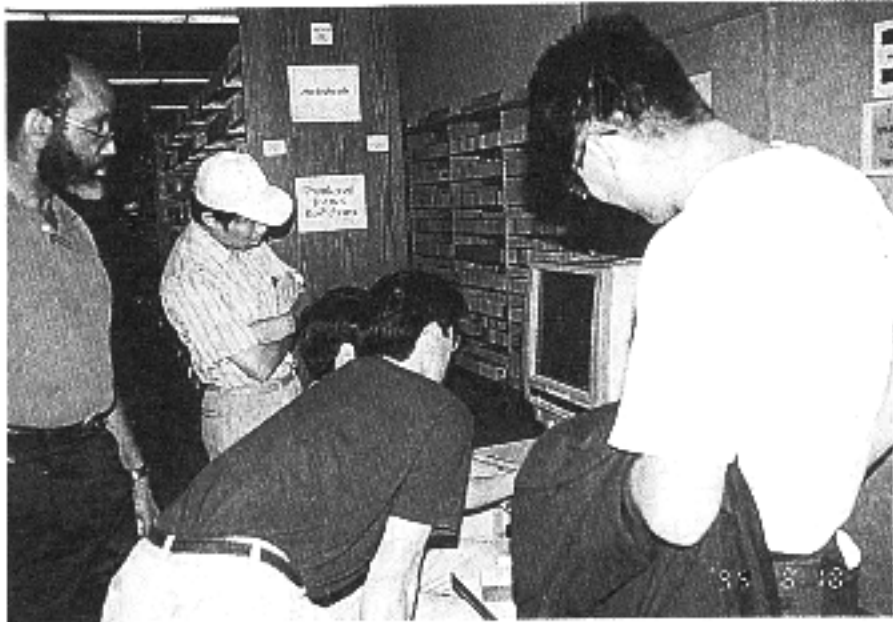


（コース・オブ・スタディ）

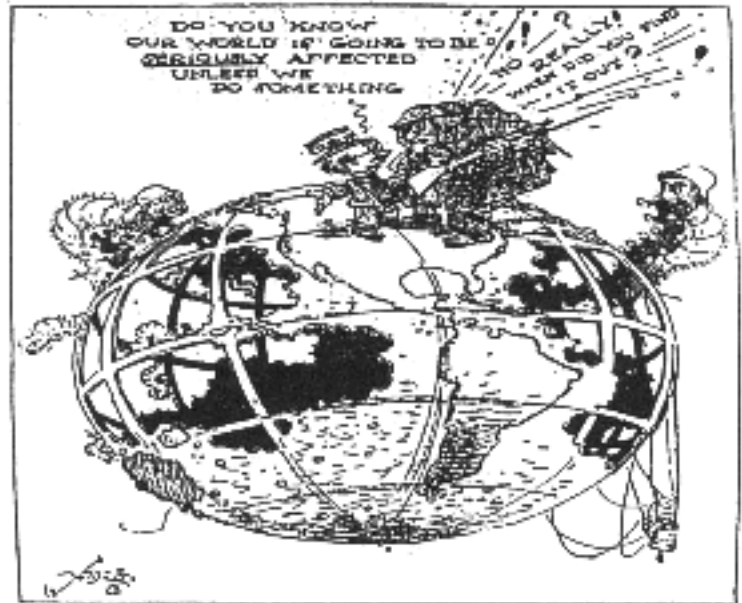


（図書のコンピュータによる検索）

イ. 太平洋戦争中のアメリカの新聞・雑誌のマイクロフィルム閲覧
 (E. C. U. 図書館)



(マイクロフィルムの検索)



(1942年の『ワシントンポスト』のイラスト)

ウ. 多民族社会における学校教育で相互理解のために努力していること



(ローズ・ハイスクールでの話し合い)

E. C. U. イトウイン・ベル氏
 ローズ・ハイスクール ジェイ・ジエスター氏
 ヴィッキー・アンダーソン氏
 フィリス・ワートン氏

アメリカの生徒は . . . 戦争がどのようなものであるかは知らない。 . . . 「身近なところで起こる戦争」は知っている。つまり、貧困・麻薬・離婚・殺人・その他の犯罪など、

生徒が関わりうるもののことである。前の日に学校を出てから、何も食わずにまた学校へ来る子もいる。彼らにとっては、学校は安全なところだ。 . . . 何人かの生徒たちにとっては、貧困のために、麻薬や窃盗した物を売ることの方が、(たとえそれが違法なことであっても)健全な市民になるための教育に打ち込むことよりも簡単なのである。

教師としては、次のようなことを全ての生徒に理解してほしいと思っている。つまり、家族の社会的な地位は高めることができるということ、自分が社会から受けていることに対して働いてかえすべきであること、目標に向かって努力する人に対して門戸がひらかれているということ

(ヴィッキー・アンダーソン氏)

世界史の学習の中には、相互理解を深めるチャンスはたくさんある。
民族主義的な考え方をこわすことは大切である。それは、他の民族や文化を尊重する方向で教え、他の文化を学ぼうとすることによって可能になる。

「違っていることはばかげたことではない」ということを学ぶことが、生徒にとっては大切である。他の文化が残した業績や自分たちと同じような問題に直面していることを学ぶことは、「すべての人は平等である」という意識を形成するうえでとても重要である。また、「異なる文化に対して非難すべきではなく、理解することが大切である」ということを学ぶうえでも重要である。

・・・歴史的事実とそこにおける人々の考え（意思）を教えることができれば、人間の価値を高めていく教育に弾みをつけることができる。

・・・歴史学習では、いくつかの項目（業績）についてディスカッションをおこような授業を構成している。そこでは、まず歴史的事実やその当時の人々の考え方に関して書かれた文章を読み、そこに何が書かれているかをとらえ、そのことが今の自分の生活とどのような関わっているのかを考えさせるようにしている。それは、自分の生活との関わりの中で事象をとらえられなければ、学ぶ意義が見いだせないと考えるからである。

（ジェイ・ジェスター氏）

エ. 日本の子どもたちへのメッセージ



（レストランで）

エリザベス・シマー氏	（ミネアポリス市）
エトウイン・ベル氏	（グリーンビル市）
ジェイ・ジェスター氏	（グリーンビル市）
ヴァッキー・アンダーソン氏	（グリーンビル市）
フィリス・ウートン氏	（グリーンビル市）

世界は（短時間で行き来ができるようになってきた）しだいに小さくなってきた。だから、平和ということは大切になってくる。自分たちは必ず誰か他者に頼っているものである。日本は中国に頼り、中国はロシアに、ロシアは・・・このように世界は1つの輪のようなものだから、どこかで戦って輪をこわしたら、世界は成り立たなくなってしまう。だから次のようなことをどんどんして欲しい。

- ・ 障害者を助けたり、クリーンアップのボランティアをすること。
- ・ 文通をすること。・ 戦災を受けている人たちに何かを送ること。
- ・ 新聞記事を読んだり、そのことについて家族に伝えたりしながらいろんなことを知ること。 などなどである。

（エリザベス・シマー氏）

1. 「戦争は年配者によって始められ、実際に戦うのは若者である。」この引用は、戦争に関して、若者に次のようなことを教えてくれている。つまり、リーダーをかしこく選び、リーダーの決定に疑問を持って、リーダーの決定に分別なく従うな、ということである。今の若者が、次の時代を担う年配者になるということを忘れてはいけない。
2. 世界の平和は身近なところからはじまる。つまり、暴力を大目に見るような国家は、自分たちの国の暴力を他国に拡げてしまう傾向にある。反対に、他者を親切にするなら、親切は他に拡がっていくものである。
3. 戦争を避けるべきであることはいうまでもないが、時としては、戦力をすぐに行使する方が、懐柔策によって事態を長期化させてもっと悲惨な方向へ導いてしまうよりもよい場合があるものである。

(ジェイ・ジェスター氏)

この国のために戦おうと思っている生徒はいないと思う。彼らは国に対して「忠誠心」は持っているのではなく、ただそこに存在していると感じているようだ。そして、戦争が問題解決にはならないと考えているようなので、(私としてはそんな彼らに)この国のため、という理由で戦いに参加してほしくない。そして彼ら自身にもそのように感じてほしいと思う。

・・・すべての文化の健康のために、愛し、理解し合うことが、生徒たちが学ばなければならない最も大切な要素であると考えます。戦争は真の問題解決方法ではなく、他者と話し合ったり、他者の考えを聞いたりしなければなりません。そして自分がどういうものなのかを知って、互いを尊重し合えるようにならなければならない。

(ヴィッキー・アンダーソン氏)

(日本の生徒へ)

世界平和は他の人間たちと話し合ったり尊敬し合うことによってのみ実現されるということに、あなたたちの多くが気づいているということがわかり、私はとてもうれしい。

他の諸文化を学んだり、他の人々がなぜそのように生きているのかを理解することによってのみ、私たちは私たちみんながもっている違いのよさを認めることができると思う。

私たちはみんな異なっている。それは正しいとか正しくないとかということではなく、まさに異なっているのである。誰かが(他と比べて)異なっているからといって、分け隔てをしてはならない。むしろその違いのよさを認め、そこから何かを学ぶべきである。

(フィリス・ウートン氏)



(E. C. U. でベル先生と)

日本人社会は、アメリカ社会よりもより精神的な色合いが強いようだ。そのことが日本人生徒の意見文のいくつかにあらわれているように思われる。日本人の生徒の中には、平和を戦争のない状態と考えている生徒が多いようである。また、他と協調して共に生きていく状態を平和ととらえている生徒が多い。他方アメリカの生徒は、より物質的で生活の質については余りこだわっていないようだ。

「知識が尊敬につながり、尊敬が寛容につながる。そして寛容が平和への道になる。」

(エドウィン・ベル氏)

オ. ホームステイ、各種パーティにおける対話

4. まとめ

我々が今回の調査を通して学んだことは数え切れず、1つ1つの体験を通して我々自身の「国際理解」に関する意識が変革されていったような印象がある。

我々は国際理解を考えると、これまでは「両者の違い」を強調しすぎてきたように思う。「こんなにも違うのだ!」という視点で、他国や他民族や他文化をとらえようとしてきた。しかし、日米の中・高生の書いてくれた意見文を読むと、それだけでは十分ではないということに気づいた。なぜなら、我々の事前の予想に反して、日米の平和に関する意見文の内容がたいへん似ていたからである。

確かに日本とアメリカでは、個々の民族や国家が直面している状況にはさまざまであり、そこには大きな違いが認められる。しかし、違いがあることを知るだけでは不十分であろう。個々の違いを認め合い、その上で「共に生きていく人類」として解決していくべき問題を解決するために「共に話し合い・考えていく」ことの大切さにもっともっと注目していかなければならない。

国際理解を進めるためには、「違いを越えて共通の未来をさぐる」という視点の変革をすすめることがまず必要であろう。

日 時	場 所	主 な 内 容	協 力 者
8月9日 9:15	ミネソタ州 ミネアポリス ホテル(ラクスフォード・スイート)	ミネアポリスでのパートナー、エリザベス・シマーさんと対面。彼女は日本留学・日本での英語講師の経験がある。2日間の調査の打ち合わせをする。	エリザベス・シマーさん
10:30	ミネアポリス市内	シマーさんの案内でミネアポリスの市内を回る。	
12:00	ラムゼイ・ジュニア・ハイスクール	夏休み中だが校内に入らせてもうことができ、日本から持ってきた生徒の平和についての意見文のコピーを、この学校の先生に受け取ってもらうことができた。後日にも返事がいただければ幸いである。	ラムゼイ・ジュニア・ハイスクールの先生方
13:00 15:30	セント・ポール市内 シマーさん自宅	事前に依頼しておいた、平和についての意見文を受け取る。主として彼女の身内から集めていただいたものらしい。	シマーさんの一族
15:30	セント・カテリナ女学院	中庭での日米友好協会主催の、セントポール・ナガサキ・イベントへ出席。現地の大学生との意見交換。	現地の大学生
18:00	ホテル(ラクスフォード・スイート)	シマーさんからいただいた意見文を、翻訳・分析する。	
8月10日 10:00	モール・オブ・アメリカ	シマーさんの案内でモール・オブ・アメリカへ。そこで昼食をとりながら、彼女から昨日いただいた意見文について、意見交換をする。先の大戦、原爆投下についての高齢者の見解、若い世代の見解、それぞれに特色がある。実際に戦争を経験した世代は、当然ながら勝利を正当化しようという意識が、すべての認識のベースとなっているし、若い世代は、観念的な正義感がベースとなっており、日米で余り考え方に差がないように思えた。シマーさんに、日本の生徒たちへのメッセージを書いていただく。	エリザベス・シマーさん レストランのウエイター
21:00	ホテル(ラクスフォード・スイート)	チームで打ち合わせ。これまで集まった意見文にシマーさんの話を総合し、全体の方向性を検討する。	
8月12日 7:30	ワシントンDC ホロコースト・ミュージアム	こんなに早くから並んで、入場は10時。すごい列ができる。アメリカでの関心の高さをうかがうことができる。4階から1階まで、ナチス・ドイツの成立と歴史的背景、ナチスの反ユダヤイデオロギーとプロパガンダの解説、ホロコーストの始まりとその対象としてのユダヤ人、ジプシー、身障者についての説明。ホロコーストの実際と、それらの資料の展示…というふうに、教育・研究機関的な内容が充実していた。(そのためか、ミュージアム・ショップでは、教師はすべて10%割引の特典がある。)	
15:00	スミソニアン航空宇宙博物館	『エノラ・ゲイ』展を見る。問題となった展示だが、結局「戦争を終わらせたアメリカの力の象徴としてのB29」という意図の展示になっていた。核兵器の破壊力とその犠牲者よりも、歴史的な意味に重きを置いた視点で構成されていたように思われる。	

日 時	場 所	主 な 内 容	協 力 者
8月14日 9:30 13:00 18:00	ノースカロライナ州 グリーンビル ホテル『ヒルトン・イン』 ～乗馬センター ECU図書館 ホテル『ヒルトン・イン』	グリーンビルでのパートナー、ECUのエドウィン・ベル教授と対面。チームの研究方針を説明する。 まず、データバンクから、平和教育についての参考になる書籍資料を検索してみるが、余り適当なものが見つからなかった。次に、こちらの学校で戦争と平和について、どのように授業で扱っているかを知るため、教科書や学校図書館に置いてありそうな書籍を閲覧し、特に第二次大戦についての記述を、後日日本のものと比較するために、コピーをとる。 ベル教授のオフィスで、事前に依頼しておいた、アメリカの子供たちの平和についての意見文、絵などをうけとる。また、同時にアメリカのマスコミの終戦50周年に関わる報道、スミソニアン原爆展中止に関わる報道、について、新聞の切り抜き、雑誌、そしてVTRの提供を受ける。 今日受け取った意見文の翻訳と検討。	Dr. エドウィン・ベル 図書館司書
8月15日 8:30 16:00	ECU教育学部 202号室 J・R・ローズ・ハイスクール	昨日受け取った資料を検討。 VTR視聴（『エノラ・ゲイ展』にかかわる原爆展をめぐる論争を取り上げた特別番組）。 ベル教授との話。チームの研究について、いくつかの示唆・助言をいただく。この段階ではっきりしてきたことは、日米の戦争にかかわる意識差を理解することが、双方が平和について語るための前提となることだった。その理解を深めるための資料として、大戦中の対日感情を具体的に示す、新聞・雑誌の社会風刺画を取り上げてみたらということになる。この日、日本から持参した生徒の意見文を、ベル教授に手渡し、アメリカ人の視点での検討をお願いする。 ホームステイ先のホスト（3人ともこの高校の教員）と対面。校内を案内してもらおう。相当な大規模校だが、生徒に対しての設備以上に、教師に対しての設備が充実しているように思えた。	Dr. エドウィン・ベル アンダーソン先生 ウーテン先生 ジェスター先生
8月16日 8:30	ECU図書館	マイクロフィルムライブラリーで、1940～1945年の新聞（ワシントンポスト）から風刺画を捜す。 （日本を敵として見下したもの、同じ人間と認めていないようなもの。）さすがに戦時中で、風刺画は多くあるが、対ドイツのものが多く、日本に対してのものは余り多くない。それでも時間をかけて幾つかをピックアップしコピーする。 ベル教授から、昨日渡した日本の生徒の平和に関する意見文に目を通した上での意見を伺う。 ①日米両国とも若い世代の平和についての意識や意見は、かなり共通点が多い。 ②そうした中で、『戦争そのものを抑止することによって』平和がもたらされるという考え方と、『すべての人が精神的にも物質的にも満たされること』が平和の条件であることという考え方の2	

日 時	場 所	主 な 内 容	協 力 者
15:30	J・R・ローズ・ハイスクール	つがあるのが特徴的で、どちらかといえば日本に後者の考えを持つ生徒が多い。 ③生徒にどのような行動を取られせることが目標なのかを指導者が明確に把握した上で、ベースとなる知識を生徒に積み上げておくことが必要とされる。 高校の先生方に、多種多様な人種、宗教をもつ生徒が集まる学校で、お互いを認め合う集団作りに配慮している点を説明してもらおう。やはり基本は差別や偏見をなくすこと、つまり相手の立場をいかにして理解させるかということ、あらゆる教育活動の場を利用して、この取り組みがなされているという説明があった。 同じひとつの国内での、これだけの意識差とそれの克服への努力を知る時、『国際協調』という題目が、いかに容易ならざる問題であるかを実感する。 こちらの先生方に、それぞれ自分の意見を書いていただく。	アンダーソン先生 ケーテン先生 ジェスター先生
17:00	乗馬センター	それぞれのチームのパートナーやホストを交えてのフレンドシップパーティ。各種の情報交換をおこなう。	
8月17日 8:30	J・R・ローズ・ハイスクール	ジェスター先生から、複数教科にまたがる総合的な社会科学習についての取り組みの説明を聞く。	アンダーソン先生 ケーテン先生 ジェスター先生
10:00	ECU図書館	昨日に引き続き、マイクロフィルムをチェック。午後は、書庫まで移動し、戦時中のTIME誌、LIFE誌からやはり同種の情報を捜す。新聞の風刺画とは異なり、より現実的でリアルな記述が数多くあり、大いに参考になった。	Dr.イドウィン・ベル
8月18日	ECU教育学部 202号室	終日、資料のまとめ。数多く集まった意見文、資料のうちどれを教材として活用するべきか。作成する教材の全体の構成を見直しながら作業を進める。	Dr.イドウィン・ベル
8月19日	ECU教育学部 202号室	各チームごとに、ここまでの研究調査の成果を発表する。	

住みやすいまちづくりを求めて

—日米の都市環境の比較を通して—

岡山県立教育センター	大月 隆昌
広島市立口田中学校	野村 隆之
岡山県立笠岡商業高校	大西幸之助

1 はじめに

「まち」の「住み手」であり、「使い手」であるはずの住民は、「まち」や環境の「作り手」としての目や意識をもつ機会があまりなく、「まち」における諸サービスの「受けて」として受身的な立場にある。その結果、身の回りの環境に対して無関心な住民が増えているように思う。

こうした中で、臨時教育審議会の第三次答申では、生涯学習社会にふさわしい「まちづくり」についての提言があつた。また、「生涯学習宣言都市」「生涯学習の町宣言」など、生涯学習の「まち」を宣言する自治体が増えている。これらの自治体は、「まちづくり」を生涯学習の推進と重ねて、結果的に地域の活性化を図ろうとするものと考えている。イギリスの近代都市計画の父といわれるパトリック・ゲデスは、次のように述べている。

「まちづくりの達成のためには、地域社会みずからが自立した政府にならなければならない。それはどうすれば可能か。自治体の援助をまつのではなく、地域が直接行動を起こす習慣を養うことによるのだ」

パトリック・ゲデスの言葉からも、「まちづくり」のプロセスに住民が主体的に参加することにより、「まち」を自らのものとして認識し、そこにおける問題を自らの問題としてとらえ、解決のための行動を他律的、強制的なものではなく、自らの意志により、「住みやすいまちづくり」を求めて取り組むことができると考えられる。「まちづくり」といった長い期間を要する事業においては、「まち」の住民である児童生徒が「作り手」として「まちづくり」の目や意識を養うことは、大変意義があると思う。

そこで、私たちのチームは、「住みやすいまちづくり」を求めて—日米の都市環境の比較を通して—というテーマを設定し、ノースカロライナ州のグリーンビルの現地調査を実施することにした。

2 現地調査の方法

私たちは、文献研究（「西欧のアメニティ・ストリート」山口喜久男）により「住みやすいまちづくり」には、自然的環境（環境、海、川、池、公園）、施設的环境（公的施設、文化的施設、上下水道、道路）、情緒的環境（伝統的行事、祭り）などの条件整備が必要であるにとらえた。そのため、ミネアポリスでは、市役所の都市計画担当者や環境、公共事業担当者に聞き取り調査を行うことにした。また、グリーンビルでは、教材開発のため、市役所、警察署、学校などを訪問して聞き取り調査を行ったり、川や公園、たばこ畑、工場などの見学をしたりするようにした。

3 現地調査の概要

【8月9日】

本日は様々な調査活動が行われ、ミネアポリスの都市環境に関する情報が多く得られた。

まず、午前中は路面電車でミネアポリスのダウンタウンを見学し、都市の全体像を把握することに努めた。興味深いことに、同市は店舗などの入った古い倉庫の外観を保っており、倉敷市の政策との共通点を見ることができた。

次に、ゴールデン・バレーの小学校とミドル・スクールを訪問した。あいにく両校は、夏季休業中のため授業を参観することはできなかった。しかし、学校の施設を視察することができた。ピルグリム・レーン小学校では教育アプローチとして、班活動が盛んで、児童が班単位で自主的に班のルールを決め、相互に評価しあっているとのことである。

午後からは、「住みやすいまちづくり」について聞き取り調査をするために、ミネアポリス市役所を訪問した。都市計画を担当されているピリー＝バインダー氏と国際関係調整係のケイティー＝フォーナー氏と面会し、同市の環境政策について説明を受けることができた。

また、同市役所の監査課で省エネルギー計画に取り組んでいる5人で編成されるチームと話し合いをする機会をもつことができた。アメリカではガソリンを始めとして、エネルギーは安価なため、市民はあまり考えずに使い過ぎる傾向にある。しかし、彼らの計画自体は地域社会に根ざしており、現時点では非常によい結果を出しているという印象をもった。

さらに、私たちは公共事業部でアポロ・システムを視察することができた。同システムは、地理、人口、犯罪率などの様々な都市環境に関するコンピュータを用いた莫大なデータベースで、データ処理の結果は都市の問題発見や問題解決のための重要な基礎資料として活用されるということである。

この日の最後の活動として、自転車をミネアポリス市の主要な交通機関に加えようというプロジェクトの会議を傍聴した。会員は、同市の主な学校やビジネス地域に市内外から簡単にアクセスできるように、自転車道を整備しようとして取り組んでいる。同プロジェクトは、非常にユニークで将来性があるという印象を受けた。

【8月10日】

本日は、ミネアポリス市の「まちづくり」に関する問題解決過程の理解をより深めるため、再び市役所を訪問し、公共事業部のティム＝デビット氏と面会し、お話をうかがった。

私たちは、まずミネアポリス市の行政の構造と、問題が発生したときに市がいかに対応するかを学んだ。同市では、市役所内の部や課がそれぞれの専門分野で独立した責任を果たしており、結果として組織全体の結束性が比較的弱いように感じられた。

次に、私たちは水質や犯罪といった現在問題となっている事柄を例に取りながら、市の問題解決過程に関して討議を行った。解決の望まれる問題点は、まず選挙民のニーズに従って優先順位が付けられ、関連部署が現状の監査を行い、実行可能な計画を作成す

る。アメリカの地方自治においては、選挙民のニーズを満たすことが第一に優先されるという印象を受けた。

【8月14日】

本日は、光栄にもグリーンビルのジェンキンス市長にお会いすることができた。市長は、非常に理解のある活発な女性で、この日は私たちに同市の行政のあらましを紹介し、様々な資料を提供してくれた。同市はHORIZONと呼ばれる都市改善長期計画に取り組んでおり、9つの都市管理分野での発展開発で努力を重ねている。また、同市は市民の積極的な市政参加をボランティアというかたちで促進している。

この日の午後はピット郡開発局を訪問し、ジョン＝チェイフィー氏と面会した。同氏はピット郡の経済開発に取り組んでおり、日本の自動車部品会社であるASMOを始めとする国内外の企業誘致を進めている。グリーンビルはECUと附属の医療センターを中心とした小都市であるため、発展成長のための経済基盤として、強力な企業を必要としているのである。ただし、企業を無条件で受け入れているのではなく、鶏肉加工や重化学工業などのター川の水質を汚染するような企業は望ましくないとして排除している。

【8月15日】

本日は、ピット郡役所のトーマス＝ロビンソン氏に面会し、同郡の施設的環境を改善するための長期的計画に関する情報を得るとともに、市政府と郡政府とがいかに共存し相互作用をしているかを学んだ。

ピット郡は、現在国内外の企業誘致に取り組んでいるが、その主な目的は以下の3点である。(1) 地域社会を活性化させる。(2) 現在はECUとタバコ産業に依存している財政を確保する。(3) 地域で教育・訓練された人材に雇用機会を増やす。前述したように企業誘致については厳しい条件を設けているが、これは同郡のように農業に依存している地域では、農業用水を規制することは現実問題として極めて困難なので、代わりに工業用水と家庭排水を規制しているということである。

【8月16日】

本日は、ピット＝グリーンビル商工会議所の副所長、バット＝バーネット氏と面会した。同会議所は様々な専門別の小委員会から構成されており、国内外の産業のピット郡及びグリーンビル市への入り口的な役割をしている。また、ECUとタバコ産業のみに依存しない財政確立を目標として掲げており、主な活動の一つとして学生の徒弟制度のようなものを奨励することによって、学校と企業との連携を促進している。

午後はC.M.Epps ミドルスクールを訪問し、アン＝ハムジー先生とジョアン＝ハリントン先生から、アメリカの学校制度の説明を受ける。ミドルスクールとセカンダリースクールの概念は、アメリカの公教育の歴史の中では比較的新しいもので、以前の中学校・高等学校の制度が個別教育を強調していたのに対して、この新制度では反動として全体指導とか強調性の育成といったものに視点が移行しつつある。

アメリカの学校の最も深刻な問題としては、日常の生徒指導に教員が時間やエネルギーを奪われ、教科指導に力を入れることが難しいといった面である。これは、教室内で

の生徒の多様性（学力差，人種的背景，言語の違い，家庭環境など）から発生する問題点のように思われる。

【8月17日】

本日は，グリーンビル当局とスペンス氏の協力により，同市の様々な施設を視察することができた。まず，目下建設中のビル内に統合されようとしている警察署と消防署を訪問し，チャールズ＝ヒルマン警察署長からグリーンビル警察の構造と機能を説明していただいた。同市のような小都市でもかなりコンピュータ化が進んでおり，効果的な組織編成が成されているという印象を受けた。

その後，ハワード＝ベインライト氏に同市の二つの主要な公園，グリーンビル・タウンコモン，そしてノースリバー・パークを案内していただいた。前者は市の中心部及びECUのキャンパスの近くに位置しており，昼休みの市民の憩いの場として機能しており，また独立記念日や国際デーなどの年中行事が催される。後者は中心部からは比較的離れたところに位置し，主に市民のレクリエーション施設，また生きた研究室としての役割を果たしている。特に後者の公園内に属する自然科学センターは児童生徒を始めとした地域社会のための学習の場として貢献している。

4 現地調査及びワークショップの日程とその内容

日 時	場 所	主 な 内 容	協 力 者
8月9日			
9:30	ホテル ラックスフォード	・現地調査の打ち合わせを行う。	パートナーは キティ＝エンロー さん
11:15	ミネアポリス ダウンタウン	・トロールカーで市内を一周する。 ミシシッピ川や古い町並みを見学する。	
12:00 ～ 13:45	ビルグリムレーン 小学校	・夏季休業中のため児童は不在であったが、教室や施設 などを見て回る。	
13:50	ミドルスクール		ビリー＝バインダ ー氏と会う。
14:30	ミネアポリス市役所	・ミネアポリス市役所の都市計画担当所、ビリー＝バイ ンダー氏と会う。 ・ビリー＝バインダー氏に国際関係調整担当、ケティ＝ フォーリナーさんを紹介してもらう。 ・同市の環境政策の簡単な説明を受ける。	
15:00	市役所内 監査課	・環境調整チーム5名とエネルギー政策についての説明 及び質疑応答を行う。	
16:30	公共事業部 デザイン課	・エンジニアリングデザイン係のティム＝デービット氏 に情報・統計・コンピュータを用いた人口、犯罪率な ど様々な都市環境に関するデータベースの作成及び情 報管理等について説明を受ける。	
17:10		・自動車通勤推進委員会の会議を傍聴する。	
8月10日			
9:30		・ホテル近くのカソリック協会で説明を受ける。	
10:00		・ゴールデンバレーのシティホールとニュータウンの説 明を受ける。	
10:25		・デイトンデパートでショッピングをする。	
11:10		・チャイニーズ レストランにて昼食をとる。	
13:00	市役所公共事業部	・エンジニアリングデザイン係でミネアポリス市役所の 組織及び行政で市の問題解決プログラムについて説明 を受け、その後、質疑応答を行う。	
14:40		・ミネソタ大学の施設を見学する。	

日 時	場 所	主 な 内 容	協 力 者
8月10日 16:40 18:00		<ul style="list-style-type: none"> ・キティ=エンローさんを宅を訪問する。 ・アメリカの家庭生活について説明を受ける。 ・ミネソタ州日米協会会長宅でのパーティに参加し、日米協会の方々と交流を深める。 	
8月14日 10:30 13:30 14:00 15:15	グリーンビル市役所	<ul style="list-style-type: none"> ・ロックスプリングス乗馬クラブで現地説明会 <ol style="list-style-type: none"> 1 スペンス氏の挨拶 2 溝上先生の挨拶 3 小籾先生の挨拶 4 深沢先生の挨拶 5 チームごとに自己研修 6 ヘンリーピール氏と現地調査の打ち合わせ 7 ナンシージェンキンス市長を囲み昼食会 ・ECUの図書館で資料を閲覧する。 ・ナンシージェンキンス市長とロナルド=キンブルシティマネージャーにグリーンビル市の概略的説明を受け、質疑応答をする。 ・ピット郡、開発事務局長、ジョン=チェイフィー氏に会い、主として自然的環境について説明を受け、質疑応答をする。 	
8月15日 10:00 11:30 13:00 18:30	ピット郡役所	<ul style="list-style-type: none"> ・トマス=ロビンソン、郡のマネージャーと会い、農業等による河川の汚濁についての説明を受ける。 ・昼食 ・各自ホストファミリー先に向かい、ホームステイを行う。 	

日 時	場 所	主 な 内 容	協 力 者
8月16日			
10:00	ビット=グリーンビル商業会議所	・ビットカウンティの商業会議所副所長のP. バーネット氏と会い、施設的環境について説明を受け、質疑応答をする。	P. バーネット氏
13:00	M.C.EPPES MIDDLE SCHOOL	・ミドル スクールについての説明を受け、学校の施設の案内を受ける。また、日本の教育問題についての意見交換をする。	A. ハムジ教諭 J. ハリントン 教諭
17:20	J.H ローズ高校	・J.H ローズ高校を訪問し、施設の説明を受ける。	
8月17日			
9:00	グリーンビルのダウンタウン	・市役所へ行った後、新しく建設中のグリーンビル警察署と消防署が統合されたビルを訪問し、チャールズ、ヒルマン警察署長から警察署の施設や設備などの説明を受ける。	
		・グリーンビル、タウンコモン公園に案内してもらい説明を受ける。	H. ペインライト 氏
11:00	ノースリバーパーク	・ノース リバーパークに案内してもらい、説明を受ける。	
11:30		・自然科学センターの展示物等について、説明を受け、見学する。	H. ペインライト 氏 (自然科学センター長)
13:00	ECU	・ECUのキャンパスを案内してもらい説明を受ける。	
14:00		・シブレス グレン ア リタイアメント ファシリテイ	
14:30	工業地帯	・工業地帯を案内してもらい、日本企業ASMO外、簡単に説明を受ける。	
14:40		・ビット、グリーンビル	
14:50		・メディカルセンターの写真撮影を行う。	
15:00		・タバコ畑の写真撮影を行う。	